

Who am I? 「自分は何者ですか」。突然とんでもないことないことを言うなあ、と吃驚してしまいます。でもそれは実に大事なことです。これは、京都東山にある幕末維新ミュージアム霊山歴史館のリーフレットに書かれてある言葉です。感じたことを胸に刻める人向きの歴史館でした。先人が何を残して今に繋げているのか感じたい人は行ってみてもいいかも知れません。素敵だと感じることもあるかも知れない。過去、ある人に言われたことを思い出します。彼は「人は悲しみや怒り、切なさの感情を持続できない」とボクに断言しました。しかし、決してそんなことはない。このことは歴史が物語っています。

さて、京都には新選組がその地にいたという史跡がいくつか残っています。二年間過ごした第一の屯所、八木邸。壬生寺。新選組から分裂した、御陵衛士の墓がある戒光寺などが挙げられますが、慶応4(1868)年1月3日に薩長主力の新政府と旧幕、会津主力の間で起こる鳥羽伏見戦の史跡、淀堤千両松「戊辰役東軍戦死者埋骨地」がとりわけ感動的です。霊山歴史館から淀まで足を伸ばすと日が暮れかけていました。線路沿いにある史跡ですが、ここで知っておきたいことと想像したいことがあります。近くには幕府老中、稲葉正邦の居城、淀城がありました。伏見から後退してきた旧幕軍は、当然入城し薩長と一戦交えるつもりでした。しかし淀藩はこれを拒否。薩長、旧幕のどちらに付くか日和見し、薩長に「錦の御旗」が揚がったことで結論を下します。錦の御旗は天皇の軍である証とされています。これを掲げた薩長と戦うことは賊という図式に当てはめられます。日和見諸藩の戦意を喪失させるには効果は十分で結果惨敗。退いた旧幕は淀川を挟んで橋本、山崎での迎撃を試みます。しかし、山崎を固めるはずの津藩が裏切り、山崎からの砲弾と淀方面の攻撃の挟み撃ちに遭い潰走。津藩藤堂氏は徳川譜代の大名でした。賊の汚名を着せられた上、信頼を寄せ期待していた両藩の相次ぐ裏切りにより、大阪城まで退却するという惨憺たる結果を招くこの地。新選組も多数の死傷者を出しました。旗印に“誠”を掲げる新選組にとってこの裏切りはどう映ったのだろうか。筆舌しがたい無念さがあつたに違いありません。次第に暗がり行く寂しげな時間軸とロケーションの中、ボクの頭の中を人間の持つ様々な感情が渦巻いていました。土方にとってこの場所は、同志たちが己の誠意を貫き馳れていく様を見ることで、自分も最後の最後まで誠意を貫くことを決意する場所だったのではないのでしょうか。自分たちの誠意は賊ではない。誠である以上、追い詰められる困難にも逃げずにあくまでも切り結ぶという矜持。ボクにとってはこのことを深く考えさせられる場所になりました。

慰霊碑の脇にある石碑には次のような言葉が刻まれています。『幕末の戦闘ほど世に悲しい出来事はない。それが日本人同族の争でもあり、いづれもが正しいと信じたままにそれぞれの道へと己等の誠を尽くした。然るに流れ行く一瞬の時差により、或る者は官軍となり或るは幕軍となって土道に殉じたのであります。ここに百年の歳月を閉じ其の縁り有る此の地に不幸賊名に斃れたる誇りある人々に対し慰霊碑の建つるを見る。在天の魂以て瞑すべし。中村勝五郎 識す 昭和45年春』と。大変感動的なので全文紹介しました。Who am I? この問いに対し、ボクは誇りある先人の流れを汲む日本人だ、というところから始めます。誠

今回は一度こういうのやってみたい!というのをやらせてもらえました。空間デコレーションという新たなものに挑戦したかったので手法も全く未経験のモノに。パリのお家パーティをイメージ。自分の中ではコレクティブはそんなホームパーティなイメージだったのと、いつもの和の空間を少し緩めてみたかったのです。

飾ったりして空間を造り上げていくのは楽しい... クリスマスを待ち遠しく感じながらツリーを飾る感覚みなさんはありましたか? 去年、初パーティ企画を経験。パーティーとはやっぱり楽しい。当日はもちろんのこと、テーマ、ドレスコード、場所...色々考えて企画する過程もワクワクするものです。日本にはあまり日常にパーティーというものをやらない雰囲気があるのが残念です。アレルギー反応して。きつとお困柄、そんなに大人も酔っておどけてみたりできないのですが、海外ではおじいちゃんも楽しそうにパーティーで踊ってます。いろんなパーティを思いつく自分がブームの先駆けとなってしまっているのではないかと...

入場したら既に見知らぬ異性とペアが組まれているカップリングパーティー。相手を探す過程が重要。別にその人がタイプでなければ他に...。強制的なカップリングは単に知らない人と会話をするきっかけ「○○てコ知らない?」です。ブラム、仮面舞踏会、バラが咲くガーデニングパーティーでは男子禁制...ドレスコードはピンクドレス。世界では様々なパーティが企画されています。

何もクラブでやるだけがイベントではない、ゲームをみんなでなくても集う事の重要性、新しい人との出会い、昼間に楽しんでお利口に夜には家に。こんなパーティーをすでにやっている人達がこんなにも側にいたのです。

「楽しい事がないとつぶやくなら自分でやったらいい。」

さて次回パーティの予告です。11月に2年ぶりとなる個展を開催する事になりました。17日にはレセプションパーティーでお待ちしております。今回のDMもその時にお目にかかる絵の一部です。コレクティブ主催者kengo matsuiとのコラボも乞うご期待。視覚的聴覚的に訴えます。

「SABI」

11月13日~24日 GALLERY MAISON D'ART (本町駅下車すぐ)
http://www.maison-web.org/next.htmlにて詳細をご確認下さい。

information

next collective

次回collectiveは2008年の1月を予定しています。
お楽しみに!

http://www.geocities.jp/collective_web/

パーティやpress collectiveについてのご意見・ご感想をお待ちしています! 皆でもっと楽しいパーティを作りましょう。
上記WEBサイトから皆さんの声を聞かせてください!

press collective

ここ数年、collectiveメンバーの中で一番野球観戦に球場へ足を運んでいるyuです。野球場という空間へ初めて行ったのは、おそらく1989年のシーズンで、父親に連れられていった甲子園球場だったと思います。89年といえば、読売ジャイアンツと近鉄バファローズによる日本シリーズの盛り上がり印象的でした。日本シリーズはセントラルリーグ、パシフィックリーグの両リーグの優勝チームが対決して日本一を決める4戦先取のシリーズなのですが、3連勝してから4連敗するというステキな敗れ去り方をした近鉄バファローズのファンになり、それからしばらく野球観戦といえば近鉄の試合でした。近鉄ファンになったおかげで、今はなき球場へいくつも足を運べたのは今考えてもいい思い出です。めちゃくちゃ狭くて、他の球場なら外野フライのはずの打球が簡単にホームランになってしまう日生球場、今では考えられないミナミのど真ん中にあった大阪球場(現、なんばパークス)、そして近鉄バファローズのメイン球場でありながら、近くに民家があるという理由で応援団の鳴り物使用が禁止されていたためマイチ乗り切れないが、程よく明るいヤジが飛び交う藤井寺球場と、今考えても個性的な球場ばかりです。小学生の頃に目の当たりにしたのはまさに人のまばらなリーグの野球場ですが、幼い時分、その有様をマイナスイメージでとらえたことはなく、紛れもなく、現在も野球観戦をつづける自分の柱になっていると思います。

そんな僕にとって観戦する野球場としての重要なポイントは、ゆったりとした空間で落ち着いて観戦できること。オープンエアで天候や風向きの変化を楽しめること。そして、観客席からフィールドまでが近いということ。ピクニック感覚で昼間の試合を観戦するもよし、ナイトゲームで夜風にあたりながらビールをぐぐいと飲むもよし。そうすると、理想的な球場のありかたというものが見えてきます。今日では、プロ野球の一軍の試合を観戦できる関西の球場は、言わずと知れた阪神甲子園球場、京セラドーム大阪、そしてスカイマークスタジアム辺りに限られてきます(年に数回、西京極球場で試合がありますが)が、僕が圧倒的に好きな球場はスカイマークスタジアム(以下、スカマ)です。ここは、上記の理想的条件に全て当てはまっちゃうんです。特に外野席からのフィールドとの距離の近さは他の球場の追随を許さぬ近さで、圧巻、圧巻です。ここをブルーウェーブ時代から本拠地として使用していたオリックスバファローズが本拠地を近鉄・オリックス球団統合による大阪と神戸のダブルフランチャイズ制の特例期限が切れ、大阪に完全移転する関係から、今季でも20試合ほどの開催しかない試合数がさらに激減する恐れがあるという現状であることは本当に残念でなりません。京セラドーム大阪への言及はここではあえて避けませんが、スカマの全体からいよいよやというほど伝わってくる美しさは「わざわざ野球場へ行く」ことの意義というものについて気付かせてくれますし、試合の結果がどうあれ、「行って良かったな」と、いつもほっこりとした気分での帰ることのできる稀有な球場だと思います。今後、ますますこの球場で野球を観られる機会は減っていきますが、行ったことのない人は一度足を運んでみてはいかがでしょうか。神戸市営地下鉄「総合運動公園駅」下車と大阪方面からは少し遠い球場ではありますが、行ってなんばの球場です。ということで、オシでシメます。

<tawakiの一言コメント>

※89年の読売ジャイアンツと近鉄バファローズによる日本シリーズで「ロッチより巨人の方が弱い」という挑発的発言を行った加藤哲郎投手は、現在「猛牛軍団」という焼肉店を経営しているとか。

vol.001 patisserie Sadaharu AOKI paris

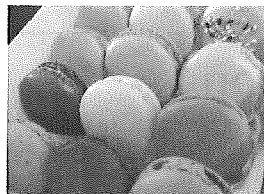
2006年秋以降、僕はフランスを中心とした洋菓子、とりわけマカロンに夢中です。マカロンは作り手によって味や食感が様々で、和菓子のように小さくとも奥深いお菓子です。今回から僕が食べたマカロンを紹介するコラムを連載することになりました。第1回は、パリで活躍する日本人パティシエ、Sadaharu AOKIです。

僕は新宿伊勢丹と丸の内店に行ったことがあります。伊勢丹のほうはいわゆるデパート下の洋菓子売り場ですが、丸の内店は路面店のブティックです。フランス菓子という比較的クラシカルな雰囲気を持つ傾向にあります。Sadaharu AOKIは現代的でポップな店内で、音楽も(言うなれば)チャライハウスがかかっており、でもそれは決してダサくはならず、そういう雰囲気をもよとするかどうかは意見の分かれるところかもしれませんが、少なくとも僕は素敵なお店だと思います。サロンも併設されています。残念ながら大阪にお店はありませんが、バレンタインシーズンなどには百貨店に特別出店したりします。

僕はいつもマカロンを買います。小さくて(親指と人差し指の先をくっつけて作る円くらいの大きさ)、カラフルでポップなお菓子。僕が好きなのは、キャラメルサレ(塩キャラメル)とペシエシナモン(桃シナモン)、それからビスターシュ(ピスタチオ)あたりです。野球ボールくらいはある大きなサイズのマカロンランも大好きです。青木氏のマカロンは軽やかな食感です。しかし一番の魅力はとにもかくにも絶品のクリームです。

今年のバレンタインシーズンには梅田の阪急百貨店に出店しており、本人も来店していました。僕はそこで買ったケーキの箱にサインを入れていただきましたが、とても優しい感じの方でした。みなさんもぜひ機会があれば青木氏のマカロンを試してみてください。

<http://www.sadaharuaoaki.com/>



「DJ Pierreの巻」

今年の夏、特に8月は異常な暑さでした。それだけならばまだしも、いつまでも猛りたる残暑で、暑さに弱いワタクシはほんとうにマイッてしまっております。ようやく朝夕に秋の気配が漂い始め、これからいよいよ実りの時期を迎えようとしているわけですが、みなさんはワタクシのようにお疲れではありませんか。

さて毎度いろんなハウス人にスポット当てつつ駄文をつづるこの連載、今回はシカゴが生んだ奇才DJ Pierreさんにズームインしてみようと思います。このDJ PierreさんといえばなにもなくともPHUTURE名義でのAcidTracksが挙げられます。以前取り上げたラリー・ハードさんがシカゴ・ハウスの一方の極である流麗さを代表するとすれば、DJ Pierreさんがもう一方の極である過激さを代表するといっても過言でないことは、このAcidTracksを一聴すれば明らかかと思えます(ちなみにこのほかにも例えばLil Louisさんという変態なんかもいるのですが、それについては稿をあらためて、と考えております)。

それほどまでに狂気の一曲として知られるAcidTracksはアシッド・ハウスと呼ばれるハウスのなかのサブジャンルを代表する曲なわけですが、今回はそんなシカゴ過激派代表のアナザーサイドという進化系の一端を紹介してみたいと思います。

AcidTracksによって一躍時代の子として脚光を浴びたDJ Pierreさんですが、アシッド・ハウスというスタイルに長くどまることはなく、だんだん音数が増えるマリサの展開を持つWildPitchスタイルという曲作りをいつのまにか編み出し、そのトッププレイヤーとして確実なヒットを飛ばしていきます。

そうしたなかでリリースされたレコードに、DJ Pierre SELECTIONS FROM THE REMIX VAULT VOL.1という2枚組があります。レーベルは往時のNYハウスを代表するEMOTIVE、リリースイヤーは1994年と、まさにNYハウス全盛時の曲といえるかと思えます。

文字通りDJ Pierreによるリミックス音源が収録されたその2枚組みのなかでもひとときワタクシの心を打って止まないのが、LET THE MUSIC TAKES ME HIGHERという曲です。構成はいたってシンプルかつ地味ながら、徐々に展開をみせるWildPitchスタイル特有の構成で、印象的なピアノのリブレインがいかにシカゴ産ハウス・ミュージックという出自を感じさせるダンス・オリエンテッドな志向性をストイックに見せつけ、LET THE MUSIC TAKES ME HIGHERというコーラスに思わず身を仰ぎつつ身を揺らしたくなるような佳曲です。

ほんとうに地味で単調な曲なので、たとえばラジオで流れたとして「オッ！」となる人はすくないのではないかなと思われるわけですが、そんな曲すらグッと引き立たせるのがハウス・ミュージックの醍醐味であると同時にDJという役割の持つ楽しみであり、そしてまたそれを共有することのできるダンスフロアの魅力というものではないかと、長くなりかけた秋の始まりに今日も略前しながら思いこふけるのであります。てなことで、秋の夜長はみなさんもお気に入りの音楽に浸りつつ素敵な時間を過ごしてください。